HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大学におけるカルト問題
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	日本脱カルト協会会報, 14, 16-26
Issue Date	2009
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47964
Type	journal article
File Information	JSCPR_daigaku.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

公開講座　カルト予防と大学の責任　2009 年 3 月 28 日　北海道大学学術交流会館

●開催の挨拶および公開講座の趣旨説明
北海道大学教授　櫻井義秀

皆さん、こんにちは。ようこそ、北海道大学へいらしてくださいました。今年は例年より雪解けが早くて、春の兆しが窺えるのではないかと思います。

日本脱カルト協会では、本学ならびに全国の大学の新入生、在校生が正体を隠した勧誘によってカルト集団に巻き込まれ、貴重な学生生活が失われることがないように、大学あるいは関係者向けの講座を開いております。今年は北海道大学ということで、「カルト予防と大学の責任」というタイトルで講座を開催させていただくことになりました。

「大学の責任」をテーマに掲げましたが、法律家の方であれば、「責任を問うのであれば、そこにはどんな義務があるのか？」とおっしゃると思います。では、大学の責任とは何でしょうか？　何が大学にとって社会的な責務になっているのでしょうか？

現在、大学では教育、研究、社会貢献、これらを三本柱として、社会に対して様々な役割を果たしていくべきと言われています。三本の柱の中で、一番大きなものが教育であると、私は考えております。教育とは、学生に専門的な知識を提供し、思考力、判断力を涵養することです。大学を卒業した後、一般的な常識あるいは市民的な倫理が欠けたら、せっかく 4 年間あるいは 6 年間勉強した甲斐がないと思っております。ですから、倫理性を涵養することは極めて大事だと思います。市民的な倫理とは、簡単に言えば「ウソをつかない」「法を犯さない」といった、ごく当たり前のことです。しかし、こうした当たり前の事柄を教えることが極めて大事だと思います。

その他、大学の役割として研究、社会貢献がありますが、これらは国あるいは文科省に対する説明責任というよりは、納税者、一般市民の方に対する説明責任だと思います。

本日は教育とカルト問題を関連させて考えてゆきたいと思います。

教育を施すときは、当然、適切な内容および方法でなされなければなりません。誤った知識を教えることはあってはなりません。また、学生が学ぶ分野を選択するに当たって、選択を強要したり、あるいは教師が優越的な地位を利用して一方的に教え込むということもあってはなりません。後者の問題は、最近アカデミックハラスメントとして注目されております。

大学におけるカルト問題は、学生がキャンパスの中で正体を隠したカルトの偽装サークルに勧誘され、いつの間にかそこに入ってしまうところから始まります。そして、学生本来の目的であった「大学で勉強する」ということが、2 番目、3 番目の目的へと追いやられてしまいます。カルトに入信した学生は、とにかく学内で新しい人を勧誘するためのマシーンになってしまいます。これは学生にとっても悲しむべきことですし、大学にとっても適切な教育環境を与えなかったという意味で問題になると思います。こういう問題が発生

しているというのが現状です。

その意味において、大学は学生の学習権を守る責任があると考えます。大学に入ったら、適切な方法で、適切な内容を学ぶことができる。この権利を大学は守っていかなければなりません。そして、学生の権利を侵害するような団体に対しては、私は断固とした処置をとることが肝要であると考えています。以上が、大学におけるカルト問題とはいったい何なのか、どう対処すればよいのか、という問いに対する答えの概要です。

今回の公開講座では、私が最初に大学におけるカルト問題について、実態をどう考えたらよいのか、お話します。

2 番目に、カルト・カウンセリングをされており、特に若い元メンバーに対してケアを行っているパスカル・ズィヴィさんに「若者とカルト・カウンセリング」というテーマでお話をいただきます。

3 番目に、統一協会によって不法に勧誘され、霊感商法等に従事させられ、貴重な時間、人生を奪われた人たちの被害を社会に訴え、権利の回復に二十数年かかわってこられた、札幌市の郷路征記弁護士に「統一協会の勧誘は憲法違反である」というタイトルでお話をいただきます。もう、タイトルそのものですね。カルトという言葉をなぜ使うかというと、具体的に名前を出すと抗議を受けるので、そういうことを恐れて方便的に使うこともあるのですが、郷路先生は「統一協会はカルトだ！」とはっきり言われております。

2 部のパネルディスカッションでは、カルトの勧誘から学生たちを守るために、私たちはどういうことを考えていったらいいのか、具体的には何をすればいいのか等について、フロアの方々の意見も交えながら考えてゆきたいと思っております。

【講演１】

■大学におけるカルト問題

北海道大学教授　櫻井義秀

●大学におけるカルト勧誘の実態

○学生の 1/4 が勧誘されており、1/3 は他人が勧誘されるのを目撃

まず、大学でどのくらいの人がカルトの勧誘にさらされているのか、北大ケースを紹介します。当大学の学生生活実態調査では、カルト宗教団体や自己啓発セミナーなどへの参加、勧誘の有無について学生に尋ねたところ、学部生は 20%、大学院生は 50%の学生が「経験がある」と答えました。この調査結果から、かなりの多くの人が勧誘された経験を持っていることが窺えます（表 1 参照）。

表１　北海道大学におけるキャンパス内被勧誘の割合

カルト宗教団体や自己啓発セミナーなどへの参加勧誘 の有無	それらを受けて嫌な思いをしたことがある	そのような経験はない。	他人が勧誘を受けて困っているのを見たり、聞いたりした。	そのような経験はない。
2001	21.9%	78.1%	27.8%	72.2%
2006	25.9%	74.1%	36.7%	63.3%

北海道大学 2001,2006 学生生活実態調査
無作為抽出、抽出率(学部生 20%、大学院生 50%）
回収率、2001,54%（1,263 人)、2006,46%（1,316 人）

また、2001 年と 2006 年を比較すると、若干ですがパーセンテージが増え、4 人に 1 人ぐらいが勧誘を受けたことがあると答えています。自分ではなくて、他の人が勧誘されているのを目撃したことがあるかどうかを尋ねてみると、2001 年では 27.8%ですが 2006 年には 36.7%と 10%ぐらい増えています。

この数字だけ見ると、カルトの勧誘は盛んになってきているのかと思われるかもしれませんが、ここには難しい問題があります。北大では、私をはじめいろいろな先生方が「カルトの勧誘にご注意」と言っております。ですから、学生が従来気づかなかった勧誘に対して「これがカルトの勧誘なのか」とわかって、認知件数としての数字が高くなっている可能性があります。ですから、実態として増えているかどうかはわからないのです。

ただ、ここで確認しておきたいのは、1000 人、2000 人の学生に聞いてみたら、1/4 ぐらいは本人が勧誘されており、1/3 ぐらいは他人が勧誘されているのを目撃した経験があるということです。

〇覚えておいてよいカルト・セクト

私は学生に注意を促すとき、カルト・セクトの名前とともに団体の概要、勧誘の手口をはっきり伝えております。

学内では、オウム真理教（アーレフ、光の輪)、統一協会、摂理、親鸞会、顕正会、勧誘活動が苛烈な福音派教会の一部、自己啓発セミナーなどが活躍しています。

・オウム真理教（アーレフ、光の輪）

1995 年に地下鉄サリン事件を起こし､その他にも様々な凶悪な事件を起こした団体です。

「カルト」という名前を広めたのもオウムと言っても過言ではありません。現在も 1300 名からの信者がいて、札幌市にも拠点があります。伝え聞くところでは、信者の数は増えているとのことです。

ここにいらっしゃる皆さんにとっては、麻原彰晃という人物が誰かということはすぐにわかりますが、学生は知りません。有名な空中浮揚の写真を見せても、「このおじさん、誰？なんで飛んでいるの？」。ですから、「これは教祖の麻原彰晃、本名松本智津夫という人で、たくさんの事件を起こした人です」と学生に説明しています。

・統一協会

学生をターゲットに勧誘している団体のうち、最も活発に活動している団体の 1 つが統一協会です。

学生には「文鮮明という名前を聞いたら注意しなさい」「真の父母といった言葉が出てきたら注意しなさい」と教えています。そして、統一協会が具体的に何をやっているのかを伝えます。勧誘の際には各種占いを使うこと。印鑑や壷、風水グッズなどの物品を販売しており、その方法が霊感商法として社会問題になったこと。あるいは、近年は学生団体である原理研究会が、新しい価値を教えるという名目で「コアバリュー」という団体名を名乗っていること。そして、いろいろなボランティアサークルをつくりながら、学内で勧誘活動をしているということを紹介します。

・仏教系団体（親鸞会、顕正会）

それから、仏教系の団体として親鸞会。ここは正体を隠し、各種の勉強会を組織して新入生を勧誘します。甚だしくは、合格発表を見にやってきた新入生までターゲットに勧誘しています。

同じく仏教系の顕正会も激しい勧誘活動に特徴があります。その苛烈さは、時に暴力沙汰で信者が逮捕されるほど。大学生だけでなく、高校生もターゲットにしており、学内での勧誘活動が問題となり、退学させられる生徒も少なくありません。

・福音派教会系の一部の団体

ここでは日本キャンパスクルセードという団体について紹介します。

この団体の代表は栗原一芳という人物です。彼は、学生を布教して宣教師にすることを会のスローガンとして掲げています。なぜ学生を宣教師にするのか。この団体は海外の宣教を考えています。その中にはキリスト教国だけでなく、イスラームの国も含まれています。学生の場合、一般市民よりもビザが取りやすく、学生ビザがあればいろいろな国に入りやすいのです。つまり、学生を宣教師に仕立てることができれば、容易にいろいろな国々で福音を述べ伝えられるのです。しかし、志は結構ですが、学生のほうは、そこまでの覚悟がないのに宣教師に仕立てられたら困ります。

例えば、キリスト教会の海外宣教については、こんな事件が起こりました。これは韓国の一部の福音系の教会ですが、アフガニスタンで布教活動を行いました。NGO として地域支援の名目で入国しましたが、活動の実質は福音宣教です。案の定、この団体のメンバーは現地で武装グループに拘束され、牧師の方 2 人が亡くなりました。

このような例があるので、キャンパスクルセードの活動は、危険な場所に学生を送り込むことにつながるのではないかと思います。布教ですから、アッラーの神様を信じているイスラームの国々へ出向いて、「あなた方の信じている神様は違う。別の神様を信じなさい！」と説くわけです。たしかに信念に基づいた行動ではありますが、やはり極端すぎると思います。

・自己啓発セミナー

こちらは、就職活動を控えた、あるいは活動中の 3･4 年生がターゲットです。学生は「自分はどういう仕事に向いているのか」非常に悩みます。そこで、「自己分析をしませんか？」「新しい自分を発見しませんか？」と誘われ、入っていく学生がいます。

〇入会の時期

新入生の時期と 3 年生から 4 年生にかけての時期が多くなっています。新入生の時期は、自分の仲間や頼りになる先輩、自分の居場所を探す時期です。こういうときに、いろんなことを優しく教えてくれる先輩という姿で彼らは勧誘してきます。3 年生、4 年生は就職活動の時期です。就職活動を行っていくと、面接で人事担当者から厳しい質問が飛ぶことが少なくありません。それまでは成績もよく、受験も大学の授業もきちんとこなすなど、ある程度順風満帆にやってきた学生でも、ここで初めて自分を否定される経験を持つ人が少なくありません。特に、最近では、企業は即戦力を求める傾向にあります。学生はこうした傾向に敏感ですから、「自分はこのまま社会に出て通用するのか」、不安になるのはこの時期です。

〇カルトと知って入る学生はいない。入ってみたらカルトだった！

学生がなぜカルトにはいってしまうのか、よく問題として取り上げられますが、カルトに入る学生はいないのです。こういうひねったいい方をしたのは、カルトと知って入る学生は誰もいないからです。知らないから平気で入ってしまう。後から、ここがカルトだと気づくのです。ここは統一協会、摂理、親鸞会だったと知らされるわけです。

そして、学生たちはその団体で得がたい関係を得たように思い込んで、なかなか抜けられないという状況があります。これが大学内でのカルト問題です。

●カルトにおける親密圏の魔力

カルトは、一見すると非常に人をいたぶって、大変な目に遭わせます。それは、その通

りなのですが、中に入っている方々、当事者の意識としては、仲間意識に守られ安心感を得たり、それまでは得られなかったある種の満足感がある状態です。なぜ、そうした心境になっていくのか。ここからは、カルトや自己啓発セミナーなどが流行する状況について、現代社会論風に説明します。

○日本の若者は、親しい人と一緒にいるときに最も充実感を感じる

まず、背景として、日本人の意識について紹介します。「国民生活に関する世論調査」では、「日本人が充実感を感じるとき」という項目について、1975 年から 2005 年まで調査しています。調査結果によれば、1 番は「家族団欒のとき」です。2 番目は「趣味やスポーツに熱中しているとき」。真ん中が、「友人や知人と会合、雑談しているとき」。逆に、低いほうでは「勉強や教養などに身を入れているとき」「社会奉仕や社会活動をしているとき」という回答が挙げられます。特に、社会奉仕や社会的活動については、一貫して低くなっています。つまり、日本人は社会的な活動にあまり充実感を感じないのです。むしろ、親しい人といるときに充実感を感じるのです（図 1 参照）。

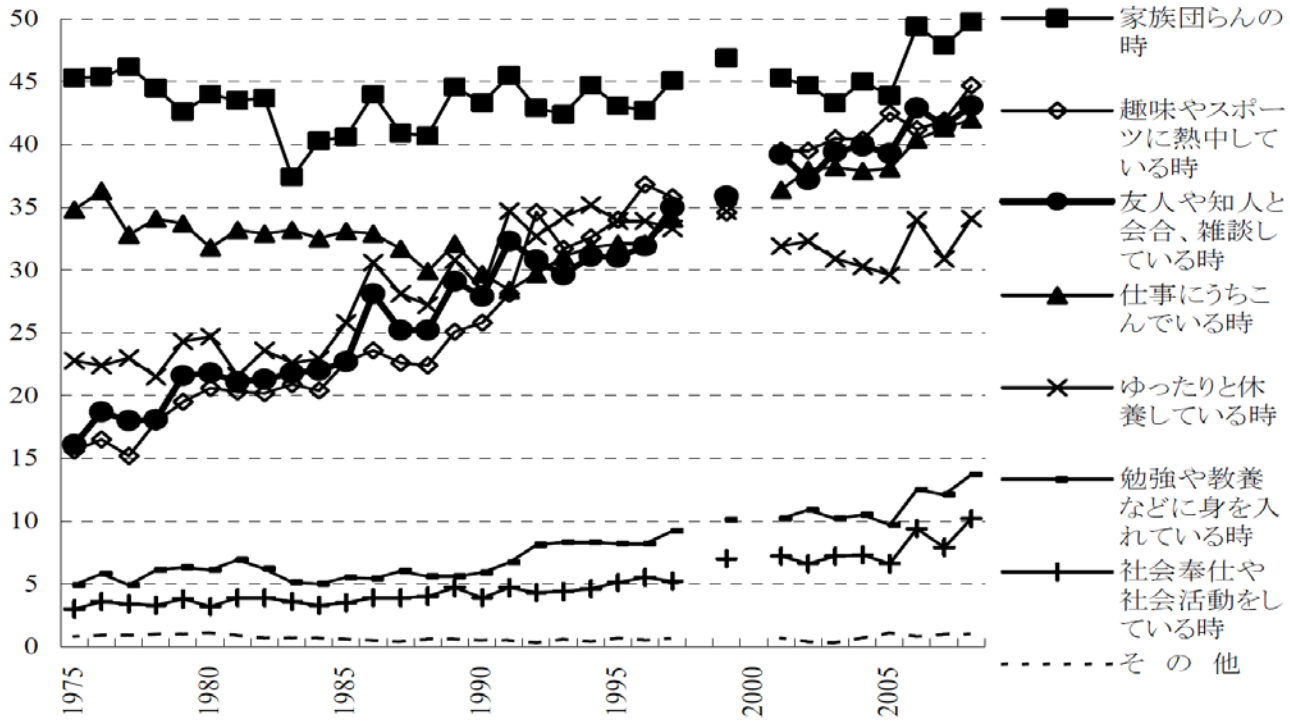

図 9　日本人が「充実感」を感じる時（「国民生活に関する世論調査」より）

ここで注目してほしいのは、「友人や知人と会っているとき、雑談しているとき」という回答がずっと上昇傾向にあることです。日本では高度経済成長以後、友人関係が極めて重要になってきています。皆さんの経験からしても、年輩の方ならおわかりになると思いますが、昔は自分の家族や親戚との付き合いが多く、それが友人関係とつながるところがあ

りました。ところが、今は友人関係と親族関係が重なっている人は非常に少ないのです。学生においては稀だと思います。学生は友人を親族の外に探さなければいけない状況にあります。

もう一つ、似たような調査結果を紹介します。「世界青年意識調査」（対象 18 歳～24 歳）でも充実感を感じるときについて調べております。日本の若者の場合、最も充実感を感じるのは「友人や仲間といるとき」（2003 年 72.5%）。2 番目が「趣味やスポーツに打ち込んでいるとき」（同 50.9%）。「友人や仲間といるとき」は、一貫して最も高い傾向にあります。

また、この調査では、悩みを誰に相談するのか調べております。1977 年と 2003 年を比較しても、残念ながら、ここにおられるカウンセラーとか相談員、宗教家というのは 10%以下と低い数字です。最も高く、一貫して上昇傾向にあるのは「近所や学校の友だち」であり、2003 年では 59.5%となっています（図３，４参照）。ですから、友人を持つということが、若い人にとっては極めて重要になっているのです。

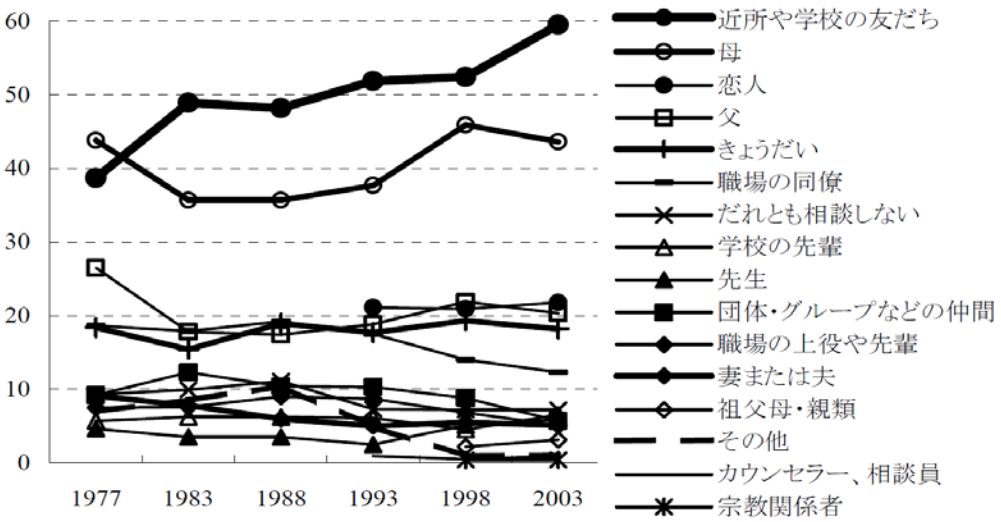

図10　日本の若者の「相談相手」（世界青年意識調査より）

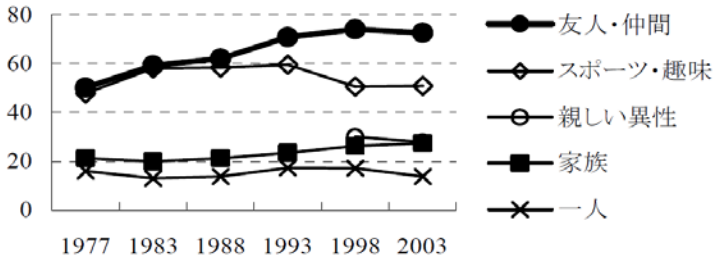

図 11　日本の若者が「充実している」と感じる状況（世界青年意識調査より）

つまり、今の若い人たちは、スポーツや趣味など何かに打ち込んでいるときよりも、気

の置けない友人といるほうが充実感を感じるのです。これが今の若い人たちの特徴です。

ちなみに、異性と付き合っているときのほうが充実感を感じるというのは、意外に少なくなっています。こうした傾向は、現在の未婚化、少子化問題にかかわってきます。別の話なので、ここでは割愛したいと思います。

〇友人を得にくい大学生たち。いったん友人ができると濃密な関係に。ただし、肝心な部分での心の交流はない

では、今の若い人たちは友人と語らって、屈託なく楽しく過ごしているのか。ところが、そうではないです。

各年代における特徴や問題点を紹介すると、小学校・中学校の一番の問題はいじめです。それまでは友人だったのに、突然関係が壊れ、誰かがターゲットになっていじめられる。いじめは彼らの間で１つのゲームになっています。いじめられることに理由はありません。誰をいじめてもいいわけです。ですから、「自分がターゲットにならなければいい」と考え、いじめる側としてゲームを続けていく。こういうやり方が彼らの人間関係のつくり方になりつつあります。

高校生は自分の居場所探し。どこに行ったら自分が活き活きできるのかと考え、居場所を探し求めます。テレビドラマで言いますと、『ごくせん』ですね。ああいう番組が共感を持って観られています。

そして、本日のテーマである大学生。話し相手がいないという学生は珍しくありません。これは学生相談の研修会で伺った話です。朝校門から入って授業を受け、昼食を食べて、午後授業に出て帰る。それまで一言も誰とも話をしない学生が、少数ながら確実にいるのです。皆さん、おかしいと思うでしょう？　どこかで友人としゃべると思うでしょう？　でも、どうやら現実のようなのです。最近は学生食堂でもミールクーポンといってカード形式を取り入れているところがあるので、「カツ丼一丁！」といって注文しなくても、お盆の上にアラカルトのサラを自分で取っていって、レジでお金を払えば済んでしまうこともあるのです。こういう状況になりつつあるので、「友人関係は大事」と言いながらも、なかなか仲間を得がたくなっています。

ですから、得がたい仲間を得ると、その人たちと非常に濃密な人間関係を持つようになります。たくさんメールをやりとりして、夜も長電話をしています。そのようにする一方で、つながった人たちと肝心な情報を共有しているかというと、必ずしもそうではありません。

あるとき私は卒業生同士のコンパに出たのですが、ある一人の卒業生の就職先を知らなかったので、その人と仲良くしていた人に尋ねました。そうしたら、「知りません」。「あなた、いつも一緒にいたでしょう？　なぜ知らないの？」と返したら、「いや、そんなことは聞けません」。要するに、就職が決まっていないような人に対して、「どこに就職したの？」とは聞けないのです。そういった点について非常に気を遣います。つまり、深夜メールを

やりとりしたり、呼び出して居酒屋で飲んだりしていても、一種濃密な人間関係でありそうに見えても、肝心な部分で腹を割って話せる関係であるとは限らないのです。

〇摂理の特徴～1 対 1 で教義を教え、仲間同士、お互いを気にかけながら過ごす

このような特殊な人間関係をつくる事例として、摂理を紹介します。摂理は、教祖鄭明析を中心に、たくさんの偽装サークルを用意しております。偽装サークルをきっかけに、若者、学生たちを誘い込んで、最終的には教会のメンバーにしていきます。

私は摂理の脱会者から話を聞いたのですが、そこで感心したことをお話します。今の大学に比べて、どこに学生をひきつける魅力があるのか。

まず 1 つは、1 対 1 でいろんな教義を教えていくところです。摂理では教義、教説を本として刊行していません。最初のメンバーが教説をノートにとったのですが、それを基にして、先輩が後輩にわかりやすくかみくだいて教えていきます。つまり、チュートリアル式の教え方をしているのです。落ちこぼしは基本的にありません。落ちこぼれた人は摂理をやめた人です。サークルに残っている限りは、最終的にメンバーになるまでに非常に時間をかけて一人一人を育てていきます。

ところが、大学ではまったく反対のやり方を取っています。大教室で標準化された方法で教えるのです。講義に着いてこられたかどうかは、半年に 1 回試験をして確かめるだけです。

摂理のもう 1 つの特徴は、ピアグループのつくり方です。ピアというのは仲間のことです。仲間の使い方が非常にうまいのです。先ほど先輩がいろいろ教えると言いましたが、同輩の人もその人が本当についてきているのか、常に気にかけています。メールや電話で頻繁にやりとりしたり、あるいは共同生活をしながら、常に気にかけてもらっているという関係を信仰生活の中で持続させていきます。これは学生たちがほしがっていた人間関係でもあると言えるでしょう。

さらに、人生観、世界観を直接教えてくれるところが挙げられます。

一方の大学では、教員は忙しい状況にあります。いろいろ専門が分かれた中で学生は勉強していきますので、孤立化しやすいという問題があります。摂理の教え方と大学での教え方には、このような違いがあるのです。

その他、学習成果を仲間同士で確認する。非常に魅力的な相手を通して学ぶ、真似ぶなどの特徴もあります。

摂理の特徴に一番近いのは幼稚園の教育です。幼稚園を選ぶとき、「この先生が好きだから、この幼稚園へ行く」と、子どもと先生との相性を重視する親は多いと思います。それと同じように、「この人が好きだから、私も勉強する」。そういったタイプの教育なのです。

ところが、大学は「人」で勉強する場所ではないのです。コンテンツ重視なのです。「中身がおもしろければ勉強してください」です。ここにはけっこうなギャップがあります。

〇直接人生観、世界観を提示し、丁寧に時間をかけて教え込む

摂理がなぜ大学に組み込めるのか、という問題ですが、大学になじめない学生というのは一定数いると思います。そういった人たちにピアグループ、ピアサークル、すなわち「居場所」を提供することによって、メンバーを獲得していくという側面があります。

ここまでの話を聞いて、「今の大学生は甘い！」と思われる方もいらっしゃると思います。でも、よく考えると、子どもたちは小学校から高校まで、ずっと先生に教えられながら勉強を続けます。さらに、塾に通ったり、家庭教師をつけてもらったりと、支援されながらの勉強をずっとやってきているわけです。しかし、大学ではそのような支援は期待できません。大学ではそういう教え方をしないのですから。

当然、こんな体験は初めてですから、とまどう学生もいます。そういうとき、親鸞会の勉強会サークルや摂理のサークルでは、実に丁寧に、これまで通りに面倒を見てくれるのです。そして、価値観、世界観をそのまま提示してくれるのです。

もちろん、大学でも世界観や価値観については教えます。学問の中には様々な価値観があり、世界に対する体系的な見方もありますが、これがわかるようになるにはものすごい努力が必要ですし、勉強が必要です。そこで、そこまで努力と時間をかける前に、「これが価値観だ」「世界はこうなっている」と提示されると、こちらのほうがわかりやすい。そういうところがあると思います。この点が、摂理がなぜ入り込めるのかという答えの 1 つになっているだろうと思います。

〇ヒーリングサロンという「居場所」を提供した神世界

「居場所」の問題は学生だけでなく一般の人も抱えています。大学を舞台にしたカルト問題では、もう 1 つ「神世界」と言う団体もメディアで報道されました。神世界が他の新宗教と似ているようで、どこが違うのかというと、宗教という内容を直接提示しないで、居場所を提供してあげるところです。ヒーリングサロンという形で、居場所に困っている人に対して、「ここに来れば話ができますよ」「自分の悩みを聞いてもらえますよ」と誘います。

悩み相談なら、カウンセラーはじめ様々な公的な機関があります。しかし、そこは敷居が高いわけです。しかし、サロンでは高級な紅茶をすすりながら、いろんな悩み事が相談できます。しかも、肩凝りや腰痛、アトピーなどの病気もヒーリングで治してもらえる。こうしたところが多くの人を魅きつけた理由と思っております。

〇演じられる親密性のワナ

しかし、摂理あるいは神世界のような団体で得られた親密性は、多くの問題を孕んでいます。なぜ、自分に対して親しくしてくれるのか。そこには理由があります。自分を誘った人は、新しいメンバーを獲得するために親密性を演じているのです。

統一協会では「ラブシャワー」と呼ばれますが、その人のよいと思われる点を褒め、居心地のよさを感じさせます。そして、いったんスポットに入ってメンバーになったら、今

度は勧誘された人が親密性を演じる側になります。そして、新しい人を何人連れてくるのか、いくらお金を出したのか、ということが問われ、それを信仰と錯覚するような心理状況に追い込まれます。

結果的に、そこからいろんな暴力的な問題が発生してくるのですが、これを暴力と考えずに「信仰生活」と受け取り、一生懸命活動に励んでいく。そして、その人の人格、行動パターンを含めて組織にとって都合のいいように変えられていく、という問題があります。

●大学におけるカルト対策

○予防、介入、アフターケア

最初に北海道大学におけるカルト対策について紹介します。

私は、本来カルト対策は 3 本立てでやらなければいけないと考えております。

1 つは予防です。これは一番効果的であり、かつ実行しやすいと思います。北大では、新入生ガイダンスの時期に、メンタルヘルスやハラスメント対策と一緒にカルト予防を行っております。

2 つ目は介入であり、カルトに入ってしまった学生への対応です。ただし、これは非常に重要な問題ですが、大学として介入するには限度があります。学生相談の機能というのは、基本的には本人、あるいは家族から相談の申し出があったときに限られます。しかし、当人は団体に入って一生懸命活動しており、自分が騙されているとはまったく思わない。家族に連絡しても、家族はなかなかこの問題をわかってくれない。そういうとき、大学は基本的にお手上げです。それ以上やるとなると、大学教員はじめ大学という組織がある種の価値観に立って「この団体に入ると不幸になるから、何としてでも出さなきゃいけない！」と腹をくくらないとできない問題なのです。ですから、私は、大学として介入するのは難しいのではないかと思っております。

3 つ目はアフターケアです。脱会した人が、臨床心理、精神医学の専門家によってカウンセリングを受ける。あるいは、金銭的な被害に対しては、弁護士の力を得て倍賞を考えます。その他、カルト問題に詳しい人と協力体制を築きながら、ケアや被害回復に努めております。

○勧誘→入信へのプロセスを理解させるとともに、自分で自分の身を守ることの必要性を説く

先ほど、効果的な予防方法として、新入生のオリエンテーションを挙げました。北大で新入生に対して、カルトに勧誘されるプロセスと要因について解説しています。

すなわち、カルトはどういうときに学生に働きかけてくるのか。そこではどういう心理操作が行われるのか。家族、友人、大学のどこに入って、環境を操作するのか。どこでどんな活動をしているのか。等々について具体的に説明します。そして、家族や周囲に入信

や活動について報告させなかったり、下宿を引き払わせたりして共同生活へと進めた結果、最終的には自分たちの所属している団体以外のことには無関心になっていく。というように、いくつかの段階を経ていくことを理解してもらうのです。

では、カルトに勧誘されないためにどうしたらいいのか。やはり、学生には「自分の身は自分で守ることが必要である」と説きます。特に「知識、判断力を身につけることが必要である」。さらに「歴史を勉強しよう」「疑似科学に騙されないようにしよう」ということも伝えます。大学である程度勉強ができていれば、簡単に入らないかもしれませんが、カルトが狙っているのは新入生です。勉強する前の学生です。これをどう防ぐのかが大事なところです。

そして、「いったんそういう団体へ関わってしまった、関わりそうになってしまったら、相談しなさい」ということで相談窓口を伝えております。「勧誘に対する断り方を練習しよう」とも言っております。

〇学生相談における積極的対応の事例

北大の学生相談室では、カウンセラー、学生課職員、学生委員の教員、プラスアルファの教員とともに、カルト相談を受けております。まず、最初に寄せられた相談がカルト問題かどうか検討します。そして、カルト問題に該当するときはどのように対応するか協議し、時には家族・関係者に意向を確認したり、大学の責任においてできる限りでの教育指導を行うなどの対応をしております。

ただし、私はそういう対応の窓口になるのですが、これはよくないと思うのです。私が北大からいなくなってしまうと、やる人がいなくなるからです。ですから、やはりこういう相談体制は、個人ではなく、部署で対応することが大切だと思います。

〇教職員が当事者になって初めてわかるカルト問題

北大の教職員がカルト問題を認識するきっかけとして、先ほど紹介した神世界の報道が大きくかかわっております。皆さんはご存知でしょうが、北大の教員が神世界に関わり、主導的な役割を果たしておりました。その教員は、自分の研究プロジェクトに関わっていた大学院生をヒーリングサロンに勧誘したほか、学内でも勧誘行為を行っていました。さらに、その教員は各地のサロンにおいて「北大准教授・脳科学の専門家」という立場で、「ヒーリング」と称する行為の「効果」をたくさんの人に説明していました。これらの行為が社会問題化する中、大学はこの教員に対して諭旨解雇処分を下しました。

私の感想ですが、この事件の教訓から、大学の教職員も少しは当事者としてカルト問題を捉えることができるようになったように思えます。カルト問題については、教職員が意識化する機会はあまり多くないと思うのです。やはり、自分が当事者にならないとわからないものです。たいていは、自分の教え子やゼミの学生が入ってしまったり、友達や親御さんから相談を受けることで初めて深刻な問題であることを理解します。そして、どこに

相談したらいいだろう、と非常に慌てます。このように実際にその立場にならないとなかなかわからない問題です。

○カルト問題は「信教の自由」の問題ではない。

教職員への対応について、もう 1 つよくありがちな問題についてお話します。大学の中で話すといつも混同されるのですが、「カルトと言っても宗教ではないか。どんな宗教であっても信仰の自由は認められるべきだ」と、信仰の価値に教えの内容は関係ないと、非常に形式論的に言われる先生がいます。ですから、カルト対策について説明すると、「信教の自由に対する差別ではないか」「宗教的マイノリティに対して抑圧するのか」などとよく言われます。皆さんもこうした経験をされていることと思います。

これに対して私は「信教の自由の問題とカルト問題は切れています。関係ありません」と言っています。なぜなら、最初に信教の自由を侵害して、正体を隠した勧誘をする団体があるからです。まず、ここが問題なのです。学生から教育を受ける機会を奪っておいて、大学は見過ごすことができるのか。あるいは、大学の教員の立場、地位を利用して学生に特定の信念を教えることがあってよいのか。ここがカルト問題の本質であって、宗教の問題とは切れています。この点を話して理解してもらおうと考えています。

○カルト入信者に対する様々な誤解

最後に、カルト問題に対してはいろいろ誤解があります。カルトに入る人は知的に劣っているとか、変な趣味があるから入ったとか。しかし、そうではありません。逆に考えてみましょう。どんな人であればカルトから勧誘されないのでしょうか。ないしは、どんな人であればカルトすら見放すのでしょうか。統一協会風に言えば、「サタンですら相手にしない」という人ですが、非常に困った人です。悪事をしたい人。自分のことしか考えない人。理想のない人。お金のない人。勇気・意気地のない人。いばり散らす偉い人。何事にも一生懸命になれない人。こういう人はカルトも使いません。

大学はこの正反対の人たちを教育しようとしています。ですから、普通の学生はカルトにとって非常に使い手のある、願ってもいない人材なのです。そこを我々は綱引きをしながら、カルトに渡さない工夫が必要ではないかと思います。

もう 1 つ付け加えますと、いろいろ物事をわかっている知識人・教養人はカルトに入らないと思われがちですが、そんなことはないと思います。専門家であればあるほど独善性に染まりやすいところがあります。これには注意が必要だと思います。それと同時に、心を許せる仲間がいない人も多く見受けられます。

その他、相互批判のない研究室。あるいは相互批判の場になっていない学会。こういうところに所属して、どんどん偉くなっていく。あるいは独善的になって、誰も注意をしないとなると、一定の方向に向かっていく傾向があると言えると思います。

〇カルト予防は大学の社会的責任。カルト対策はよりよい社会づくりにもつながる

1つは、カルト予防は大学の社会的責任だろうと思います。世の中にはいろんなカルトがありますが、大学は最も有力な人材の供給源です。ここを絞ることが、社会のカルト問題に対する対策になると思います。

2番目は、いろんなカルトや小規模なサークルには魅力があると思います。しかし、それは偽装された魅力であって、そこに長くいると、学生は成長しませんし、家族も困ります。大学を出て社会に出ると、いろいろな問題を発生させる恐れがあります。ですから、そういう危険性もあらかじめ学生に伝える必要があると思います。

以上の意味でカルト問題対策というのは、大学の教育支援・学生支援の中で特殊な問題のように見えますが、実はそうではないことがおわかりいただけるかと思います。カルト対策は、大学の中で、あるべき適切な教育環境を維持して回復していくために必要なことでもあるし、よりよい社会づくりにもつながると思います。

ご清聴ありがとうございました。